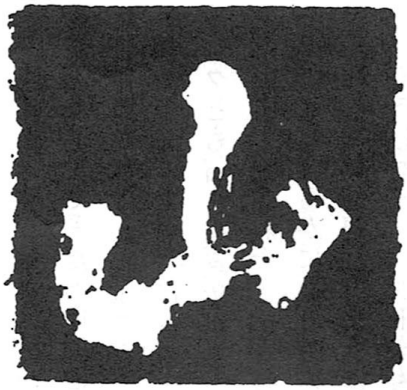


2021年（令和3年）
6月号（No. 913）
公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

目　次

山よりも本が大事と…
―近藤 等先生の蔵書をめぐって― … 1
晩年の深田久弥さんと世界百名山 … 4
支部長が代わりました …… 6
図書および資料のデジタル化と公開 … 7
1933年発行の1枚の会員カード …… 8
地域発「山の日」レポート⑨山陰支部 … 9
連載　島の山旅への誘い6 …… 10
新入会員 …… 13
図書受入報告 …… 13
東西南北 …… 14
図書紹介 …… 15
会務報告 …… 17
ルーム日誌 …… 18
会員異動 …… 18
INFORMATION …… 18
編集後記 …… 19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
★新型コロナウイルス感染防止対応のため、当分の間、取扱時間を短縮します。平日13時～20時

REMEMBARANCE

晩年の深田久弥さんと世界百名山

黒田洋一郎

深田久弥さんが亡くなってから、もう今年で50年になる。この50年で、深田さんの名は昔よりはるかによく世間に知られるようになったが、彼を直接知る人は少なくなった。親しかった友人知人など深田さんを知る人の大半が、あの世に行かれてしまった。私は晩年だけのお付き合いだったが、そのころちょうど深田さんが苦労して書いておられた「世界百名山」連載の事情と、その後の「私の世界百名山」連載など、山の登り方、眺め方などへの深田さんの影響を述べる。

「一高旅行部の再建だ」

私は1963年、大学に学術調査探検部を創った。学生および大学院生を通じ9年制で、部長は泉靖一さん（東大東洋文化研究所所長／文化人類学教授、旧京城帝大時代に山岳部を創り、インカ遺跡発掘で有名）にお願いした。泉さんと深田さんは、高田宏さん（深田さんと同じ石川県大聖寺の生まれ。のちに「深田久弥山の文化館」館長）が作った『エナジー』という石油会社の広報誌の傑作「探検特集」で顔見知りだった。

それもあるのか、深田さんは「探検部創設は一高旅行部の再建だ」と大いに喜ばれ、すぐに部の顧問になってくださった。私は探検部の初代マネージャーだったので、部の報告や相談に東松原のご自宅に何回も訪れる機会があった。飛び込みで行っても、私が高校で長男の森太郎さんと同期であったためもあるのか、深田さんのマネージャー格であった志げ子夫人は大変親切で、なんとか忙しいスケジュールに割り込ませてくださった。

今思うと深田さんは、私をどうも「今はなき一高旅行部の後輩格」として扱ってくださったようで、ビールを飲みながら気安く登山や探検などの話をしてくださった。深田さんは「縦の会（一高旅行部OB会）」の会員ではあったが、本郷のスキー山岳部には入ってはおらず、山岳部の後輩は元々いなかったのである。「縦の会」といえば、晩年ご夫婦でギリシャや東欧の山々を楽しんでおられた中村純二さんが最後の世代で、私も親しくしていただいたが、残念なことに昨年、亡くなられてしまった。

ヒマラヤからシルクロードへ

最近は、『日本百名山』の著者として誰でも知っている深田さんだが、私が探検部創設でお世話になったころまでは、むしろヒマラヤ研究家として、地味に山岳関係で有名だった。そして、深田さんには、「英仏などの山岳関係の古書、文献を、高価でも手に入れ（志げ子夫人の理解と助力もあった）隅々まで読むなど、古い山の資料を丹念に調べる」面があった。

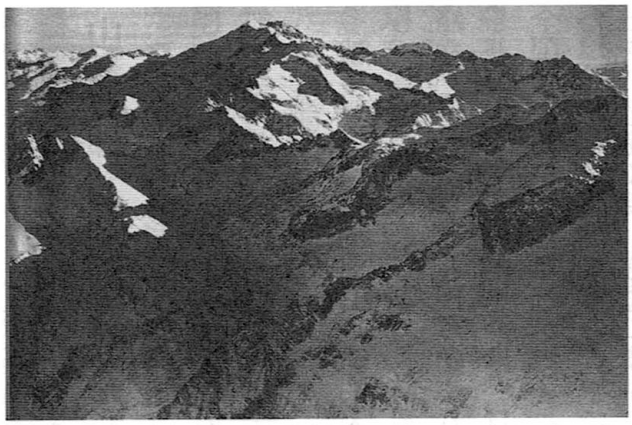
実は、晩年の1960年代後半から70年ごろは、深田さんも新しい方向に向かっていたらしい。あるとき志げ子夫人に「もうヒマラヤは卒業して、これからはシルクロードをやりたい」ともらし、「山から麓に変わったの？」と夫人が尋ねると、遠くを眺め、憧れるような目をして「麓には長い歴史があるからなぁ」と答えたそうである（深田さんの本当の絶筆、深田久弥・長沢和俊著『中央アジア探検史』〈白水社、1973年〉の巻末、志げ子夫人の後書きより）。

志げ子夫人の話は後で読んだので、この深田さんのシルクロードへの転進は、当時は知らなかった。道理で、正式に探検部の顧問をお願いにご自宅に伺ったとき、深田さんは古い本や地図、写真を次々に出し「第1回の遠征は、シルクロード探検にしよう」と熱心で、井の頭線の終電を逃しそうになった。今考えると、学術調査探検部の遠征でシルクロードの中央主要部分、中国の河西回廊から楼蘭、ニヤなどの遺跡を含むタクラマカン砂漠、カシュガルへのオアシスの道の旅を、夢見ておられたのであろう。これらの部分の遠征は、当時の中国の政治情勢から絶対に無理だったが、可能だったソビエト連邦中央アジアの都市など西の部分は、実際1966年に約5ヶ月もかけて行っている。

難産だった『世界百名山』

たびたび訪れたご自宅で、当時の深田さんは名著『日本百名山』の出版後、その世界版として『岳人』誌の「世界百名山」の連載執筆に苦労されていた。

今では信じられないほどだが、当時の世界の山々は国際航空便の発達が悪く、登山家でも世界の山々には、まだ実際には行けない山が非常に多い状態であった。一流登山家と言われた人でも、自分で直接見たり登ったりしている山は、アルピニスト好みのごく一部の山に過ぎず、知らないほかの山は、写真や伝聞で勝手に選んでいた。深田さんもこの事情を「世界の主な山を全部見た上で百を選べる人は、世界にまだ一人もないだろう。しかし、世界は狭くなりつつある。やがて、そんな人が出てくるかもしれない。」と、死後に出版された深田久弥著『世界百名山―絶筆41座―』（新潮社、1974年）の最初に書いている。



ノルウェーのスネーヘッタ（右）とスペインのアネト。深田さんが想いを馳せたであろう山々。『La montagne』（Larousse、1956年）より

米国の山岳家・アレマン（mountaineer Ulleman）は、深田さんより前に「世界の百の山」を選んで発表していたが、アルプス、ヒマラヤにひどく片寄っており、深田さんは『毎日グラフ』上で、アレマンの選択のひどい地理的な不公平さを批判していた。その深田さんの批判を山岳雑誌『岳人』の編集長が読んだためもあろう、深田さんは「世界百名山」の執筆を頼まれ、外国旅行中で、まだ承諾もしていないときに、勝手に雑誌に予告が出るという〝錯誤〟があり、執筆を〝やむなく〟引き受けられた。

深田さんは、はたで見ていても、この難しい原稿に四苦八苦しておられた。旅行部の後輩格の私には気安かったのであろう、問わず語りに「実際に世界の山に行きにくいのはもちろん、今、世界各地の山々の情報は、アルプス、ヒマラヤなどに偏り、まだまだ少ない。その上、私は最近いろいろ忙しいので、私のやり方である、丹念に外国の文献資料を集めることが、もう十分にできない。月刊誌に毎号1山ならともかく、毎号3山も書くのは、時間的、体力的に無理だ」とボヤキながらも、必死で連載を続けられていた。

実際、「世界百名山」連載中、ある号ではアララト1山しか書けず、余録として、忙しくて残りの2山は書けなかった事情を詳しく書き、しかも最後には、「『日本百名山』は自信があるが、世界の百名山は自信がない。このような自信が無いことをはじめたのは私の内部の意志よりも、外部から押し付けられた気味が多分にある。しかし弱音を吐いているのではない。世には押しつけられても立派な仕事を果たした例が幾らでもある。徹夜でここまで書いて、とうとう（夜が明け山への出発）時間が来た。……」と自分を鼓舞している。この老いた深田さんの「世界百名山」への執念を、身近に見てきたこともあり、没後まとめられた『世界百名山―絶筆41座―』にも刺激され、できたら深田さんの遺志を継ぎ、せめてもの恩返しに私が世界百名山をやりたいと思っていた。

幸い私のこの志は、東京都神経科学総合研究所勤務の忙しい40歳代から実現しつつあり、藤田恒夫編集長のご好意で、医学文化系季刊誌『ミクロスコピア』に66山まで連載できた。なお、この私が眺めて選んだ「私の世界百名山―山と人と花鳥風物―」のリストや紀行文と絵地図、カラー写真は、探検部の前に卒部した東大ワンダーフォーゲル部（TWV）の藤野浩一さんに還暦祝いに作っていただいたHP（http://www.age.jp/~yusan-jin/）で、関係する私の文とともに66山全部を見ることができる。

なお、日本の山岳信仰の研究は多くやられているが、世界でもやっている人の少ない「世界の山岳信仰」を、次号の『山岳』（2021年版）に掲載予定である。